

マルコによる福音書 9:30～41

「わたしが一番偉い」

2025年3月23日(主の日)

第8章の31節で主イエスは最初の受難・復活予告をなさいました。そして、その後、山に登って光輝く姿をお見せになりました。ここがマルコによる福音書の真ん中の山だと考えられるとお話ししました。ここから主イエスは十字架に向けて歩いていかれるからです。山を降りて、そこで主イエスが目になさったのは、不信仰、主イエスなしにはやっていけない弟子たちとそういう世界そのものの姿でした。そして、主イエスと弟子たちは旅を続けるのですが、今までとは少し様子が違うのです。本日の箇所冒頭で、「一行は・・・ガリラヤを通過して行った」と記されます。さらに、「しかし、イエスは人に気づかれるのを好まなかった」とも記されています。到着するカファルナウムはガリラヤ湖の湖畔の村ですから、ガリラヤ地方を立ち去ってしまったわけではありません。けれどもガリラヤを通過していった、といいます。主イエスは人に気づかれたいとおもっておられました。ここから先を見るとわかりますが、主イエスが群衆をお癒やしになることはもはや記されません。エルサレムに入城する直前に特別な意味のある癒やしがありますが、それ以外は皆無です。それ以外に主イエスはお自分がなすべきことがおありである、集中すべきことがある、と考えておられたのだと思います。ここまでガリラヤは主イエスが飼い主のいない羊のような群衆に出会い、教え、癒やす、神の国を伝える、そういう場所だったのですが、もはやガリラヤは通過点となったのです。ここからは、弟子たちを教えることに集中なさる、子供を連れて親や神の国を求めて主イエスを訪ねる人との出会いはありますが、それらの出来事もまた弟子たちに教える機会として用いられるのです。主イエスが人に気づかれるのを好まれなかった理由として続いてこのように語られます。「それは弟子たちに、『人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する』と言っておられたからである」。第二の受難・復活予告ですけれど、ここでは内緒話を聞かれたいから、のような印象を受けるかもしれませんが、第一の受難予告では「弟子たちに教え始められた」とありました。この受難・復活予告は主イエスの宣言であり同時に弟子たちに教えるべきことがらであったわけで、本日の二回目も単に「言っておられた」というより「教えておられた」と理解した方がいいでしょう。この箇所を言い換えれば、「主イエスは群衆に会うのを好まれなかった。なぜなら、弟子たちに受難と復活のことを教えておられたからである」といってもいいとおもいます。弟子たちに受難と復活を教えることに集中するために、人に気づかれるのを好まれなくなったのです。ご自分の苦難、死、復活に弟子の存在はかかせないからです。けれども、弟子たちは主イエスのおっしゃることが理解できず、かといってどう意味ですかとは怖くてたずねることもできませんでした。ペトロは一回目のときに主イエスをいさめて「そんなめっそうもないこといわないでくだ

さい」などと言ったのでしょうが、人のことを思っているサタンだとかえって主イエスに怒られてしまいましたので、「そんなとんでもない」とすら言えません。怖かったというのは、主イエスが苦しみに遭われることを恐れたのかもしれませんが、おっしやることをまっすぐ受け止めることができなかった、ということでもあるでしょう。そして、主イエスに従いますとって従っている自分の身に危険があるのではないか、そういう怖さであったのかもしれませんが。これは決して直接の弟子たちだけの姿ではありません。わたしたちも、主イエスを信じて従っているつもりですけれど、いざ信仰のゆえに苦難を受けるとなると、果たしてどうなるか。苦難とまでいわなくても、なんらかの苦勞を担うことにもたじろいでしまいます。なぜ自分がこんなことしなくてはならないのか、と。主イエスの教えておられることを理解しない、とは、話しの内容がわからない、という頭の理解度の問題ではすみません。主イエスの弟子として自分がどうあるべきかがわからなかった、主イエスに従う者は何をすべきなのかがわからない、という自分自信の根本的な問題なのです。

その姿が続いて描かれます。カファルナウムの家につくと、主イエスは弟子たちにおっしやいました。「途中で何を議論していたのか」と。弟子たちはだれがいちばん偉いか、と議論していたのです。自分たちもわかっていたから、主イエスに質問されて答えられなかったのです。まったく主の弟子にふさわしくない議論のテーマであることはわたしたちにもわかります。けれども、主イエスが苦難を受けられ、十字架で死なれ、復活なさったことをまっすぐに受け止めないならば、わたしたちも弟子たちと同じことを話すのではないのでしょうか。トピックは主のご受難ではなくて、誰が一番偉いか、です。「偉い」とはっきり言わないにしても、自分がどれだけ一生懸命やっているか、ということを中心に思う。そして、あの人はなぜ何にもやらないのか、と呟きます。あるいは、自分が一番よくわかっている、と思うかもしれません。だから、あの人は全然理解が足りない、という目で人を見始める。あるいは、あの人はすごいです、あなたはすごいです、わたしなんてまだまだです、というときには、決して自分が偉いなどとは言わないけれど、自分は偉いとは思われたくない、注目してほしい、ということであるならば、自分のことを考えているという意味ではおなじことです。主の十字架を受け入れない、主の命に生きていないと、ただ十字架がわからないだけ、ということはありません。十字架のかわりに、なにか他のものがわたしたちに忍び込んでいるのです。罪はいつでもわたしたちの不信仰をねらっています。いえ、わたしたちは主イエスがおられなければ、いつでも罪の支配の下に戻ろうとしてしまうのです。

そこで主イエスは、「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」とおっしやいました。ただそう教えられただけでなく、そこにいた子供の手をとって、立たせてみんなの方を一旦むかせ、そして抱き上げられた。主イエスは座っておられるのですから、わたしたちが床に座ってやるように、膝に乗せたのかも

しれません。そしておっしゃいました。「私の名のためにこのような子どもの一人を受け入れる者は、私を受け入れるのである。私を受け入れる者は、私ではなくて、私をお遣わしになった方を受け入れるのである」。新約聖書の時代、あるいは旧約の時代もそうかもしれないかもしれませんが、子供というのは決していい意味ではありません。純粹無垢な素直な存在などとは理解されていません。子どもとは、弱い存在、大人の助けなしには生きていけない、もっといふならば、何の役にも立たず、何も生み出さない、ただ親の世話にならなければ生きていけない迷惑な存在です。いちばん偉くなるためには、このようないちばん偉くない人を受け入れなさい、後になり、仕えなさい、と主イエスはおっしゃいます。それでもわたしたちにとっては子供に対するいい印象をとりさって考えることはむずかしいかもしれません。そこでこういう風に考えた人がいました。そこにいたのはたまたま子供ただけで、ひょっとして癒やしを求めて家にきた、重い皮膚病の人がいたら、その人を近くに呼び、包容して「このように汚れている人を受け入れる者がわたしを受け入れるのだ」とおっしゃったろう、と。もしその場にあの憎き徴税人、ローマの手先になりさがって、税金の名のもとに法外なお金をまきあげる徴税人がいたら、やはりその人を抱き寄せて、「このような罪びちを受け入れる者がわたしを受け入れるのだ」とおっしゃったでしょう。「あなたがおもいうかべることができる一番にくい人をおもいうかべてごらん。その人を受け入れるならば、わたしをうけいれたことになるのだよ」と主イエスはおっしゃるので。こういわれれば、それがいかに難しいことかわかります。「そうですね。たしかに子供は一人では生きてけません。わたしはこれからはこどもが多少にくたしくても受け入れられます」などとは言えないはず。主イエスを受け入れるとは、わたしたちの心の持ちようであったり、自分がしっかりすればいい、ということではないのです。

事実、だれもが主イエスを受け入れたいと願っているはず。わたしは受け入れていますという人もいるでしょうし、まだ信じきれないのですが、できるならば受け入れたいと願っています、という人もいるかもしれない。弟子たちも同じです。それどころかすでにすべてを捨てて着いてきているのです。けれども、わたしたちの中の罪は、小さいもの、もっとも偉くないものとしての主イエスを受け入れることをこぼみます。話しはもどりますが、受難予告の言葉はこうなっていました「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される」と。一回目は主イエスを苦しめ、殺すのは「長老、祭司長、律法学者たち」となっていました。すなわちユダヤの指導者たち、宗教指導者たちです。けれども、この2回目で主イエスは「人々は」とおっしゃいました。あらゆる人が主イエスを苦しめるのです。主イエスを不正な裁判にかけ、十字架刑をローマに認めさせたのは歴史的にはユダヤの指導者かもしれません。けれども、ここ「人々」の手に引き渡され、殺される、とおっしゃった時、主イエスはあらゆる人のことを考えておられたかもしれない。自分に向けられるあらゆる人の罪を思っておられたに違いないのです。実際弟子たちも、主イエスを裏切って逃げ、あのペトロも三度、知らないと言ってしまうのです。そしてこの「人々」という言

葉を「人間の罪」と言い換えるならば、わたしたちもまた主イエスを十字架につけてしまうことがわかります。主イエスの救いの意味を理解せず、ないものとして、自分がいちばん偉い、一生懸命だ、わかっていると思う心は、主イエスから自分をどんどん遠いところに連れて行ってしまいます。神を愛することも人を愛することからも離れてしまいます。

十字架において主イエスはもっとも弱い者、情けない者、虐げられた者になりました。ご自分こそが、いちばん偉くない人、最もうすよごれた人を受け入れられたのです。それがわたしたち人間です。ご自分を殺すような者わたしたちを受け入れてくださったのです。主イエスはわたしたちの後になり、仕えてくださいました。しかし、十字架にかかるほどのことだったのです。けれども神はこの御子を復活させられました。復活の主に出会って、弟子たちは赦されたことを知り、主の救いを知りました。ここから生きていけると悟ったのです。主イエスに受け入れられたことを知りました。あの、主イエスに抱き寄せられた子供の姿はわたしたちの姿です。主イエスはわたしたちを抱き寄せて、「この罪人を受け入れるのが父の神の御心だ。わたしはあなたを受け入れる」と言ってくださるのです。

これは、復活の主に出会っての話であり、弟子たちの無理解は残念ながらまだ続きます。ヨハネが、勝手に主イエスの名前を使って悪霊を追い出している人をやめさせます。自分たちこそが主イエスの弟子であり、主イエスのお名前を語るのはわたしたちの専売特許だ、無許可で主イエスの名を語ってはいけない、というのです。だれが一番偉いか、というのは外の人にも向かいます。やめさせるとは受け入れるの反対の態度です。主イエスの名を語ることは、ヨハネにとってはとんでもないことです。受け入れることなどできようもありません。もちろん、この悪霊退治を行っていた人は弟子ではありませんけれど、しかし、主イエスの悪口は言わないだろう。それだけで今は十分だ。弟子とはよべないかもしれないが、味方なのだ。これから行く先々で、あなたたちにいっぱい水を飲ませてくれる弟子でもない人がいるかもしれない。そのような人もわたしは忘れない。そうおっしゃるのです。一生懸命すべてをささげて信仰生活をしているわたしたちからすると腑に落ちない思いがします。それだけでいいの？けれども、これはずるくもなんともないことです。わたしたちは、実際、信仰者でない人たちから水をいっぱいもらうようなことで生きている面もあるのです。信徒でない家族が理解し、協力し送り出してくれなければ礼拝生活は難しくなります。たとえそれがしぶしぶで、であってでもです。明治時代には、キリスト者というだけで野菜を売ってもらえなかったり、石を投げられたことだったあつたのです。信仰について理解していなくても、礼拝にこようと思わなくても、わたしたちとともに歩んでくれる人がいる、主イエスはそのような人も決してお忘れになりません。主イエスの人を受け入れられる広さは、わたしたちよりもはるかに広いのです。そして、そのような人もいつか主イエスと出会うようにと祈りながらおつきあいをしていく、それがわたしたちの伝道です。わたしたち自身は、主イエスを救い主として信じる信仰を与えられ、主に従う道こそが生きるべき道と信じ、神を愛し人を愛することを求める幸いの中を生き

ています。主イエスに赦されて、わたしはあなたを受け入れると言っていただけの喜びの中を歩いていきます。